

古谷嘉章

『憑依と語り — アフロアマゾニアン宗教の憑依文化 —』

(九州大学出版会 2003年 367頁)

林 和 宏

『憑依と語り — アフロアマゾニアン宗教の憑依文化 —』はもともと1992年の博士学位論文『憑依霊としてのCABOCLO：アフロアマゾニアンカルトの憑依文化』を土台としており、2003年の出版に到るまで10年の空白を持つことになる。その間、著者は様々な媒体で発表された論文を集成した『異種混淆の近代と人類学 — ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから —』(人文書院、2001)を世に問うている。そこで同論文に言及しつつ『界面的な現象』こそが文化のダイナミズムを理解するために、より価値があるのではないかと著しているが、この問題意識は所収された諸論考に通奏低音として流れている。

現在においても「貧困」「革命」「先住民民族」などラテンアメリカに注がれる眼差しは、「第一世界」の自己の欲望を投影したロマンティズムに彩られている。著者はかかる本質化に抗い、それが機能不全に陥る地点まで人類学的参与観察を通して必死に寄り添おうとする。そこにあるのは決して中立・没価値的な実体としての「文化」ではなく、多様な変数に媒介され — 時には、「客観的」な観察者であるはずの著者をも巻き込み —、接触しあう中でこそ生じる何か別様なものとしての文化である。否、むしろ文化とは本来そういうものではなかったか。古谷はそれをカッコ入れすることなく執拗に問う。アフロアマゾニアンとは何なのか。それを語る者とは誰なのか、と。

本書は全5部より成る。第1部「アフロアマゾニアン宗教の歴史と現在」においては、副題にも掲げられている「アフロアマゾニアン宗教」とは何かという探求がなされ、その構成が歴史的文脈に配置されていく。続く第2部「アフロアマゾニアン宗教の憑依文化」では、現地調査の成果へと移行し、ブラジル・パラ州ベレンのミナナゴを中心に、憑依文化における「グループの組織、憑依霊の世界・憑依儀礼の構造」(p.10)が描写される。共有の形式が見られるとともに、その多様性が図らずも露出する。まさしく「均質ではないが共有されたひとつの場」(p.67) = 「語りの共同体」としてのミナナゴが参照される。第3部「憑依・語り・個性化」では、よりミクロな個人体験が焦点化されるが、すぐれて文化的な憑依現象は超越的に存在し空疎な個人の身体を包囲するものではなく、憑依のイディオムによってアーティキュレート(「ある出来事を解釈して、いやむしろ構築して、それを意味あるものとする行為」(p.152)クラパンザーノよりの引用)されることにより初めて、意味ある体験として認知される。こうした(非)言語的語りを通じて「私的な幻想をこえた社会的な事実」(p.160)として了解されていくのである。

第2部で言及される「舞台装置」はそうした社会・個人的な次元がせめぎあわれる場として機能する。同時にメディアム（実際に憑依を体験する人）の「頭」においてカボクロ（caboclo）は個性化されるゆえに記述が容易ではないとする。そうした中でなお、それが〈外者の内部化〉を表現するものであるとされる。それが第4部「憑依霊としての CABOCLO」に該当する。第5部「アフロアマゾニアン宗教のブラジル」ではこうしたカボクロをめぐる語りの伝統が大都市を中心に形成され「国民的・全国的宗教」へと発展するウンバンダの持つヘゲモニックなアマゾンの語りを脱中心化し、「植民地化的な統合の物語のなかで、自己表現の機会を奪われてきた」（p. 298）アマゾン民衆の声の可能性が論じられる。個々人のアイデンティティともかかわる語りの別の有り様が憑依儀礼を通じたアマゾンのカボクロの語りの中に探られる。

アフロアマゾニアン宗教とはポルトガル植民地主義を基礎に展開されたブラジルへのアフリカ人奴隷の導入と、その奴隷がもちよるアフリカ各地域の文化・慣習と主にカトリシズムのそれらが出会うことにより形成されたものである。しかし、その内実は、容易な一般化を拒むような多様性を孕むものである。まず、「アフロ」という名称が想起させる単一化されたアフリカ表象を超え、雑多な民族・地域の影響が存在し、それがブラジル各地にて独立的に形成されていったこと。さらに、それらが現地の「ブラジル文化」との接触によって独自の変容を遂げたこと、である（p. 15）。繰り返し注意が喚起されている如く「いかなる意味においても、ブラジルで存続しているアフリカの宗教ではない」のである（p. 36）。

その憑依宗教は、近代化・都市化という文脈の下、単独的な信仰の問題であることを放棄し、「市民」であることと不可分の道徳的問題として認知され、その境界が管理の対象として議論の俎上に乗せられていく。アフロブラジリアン研究の端緒がニナ・ロドリゲスら法医学者によって担われているという事実が象徴的である。そもそも「アマゾン」それ自体が植民地化・国家による開発戦略の産物であり、そこで動員される地理学的想像力によりその境界が策定されてきたことを確認しておかなければならない。「自ずから辺境なのではない。ブラジル国家によって辺境とされた」（p. 32）のである。同地方のアフロブラジリアン宗教は北東部のそれに比べ軽視され、その事実はブラジル先進地域による内なる他者「辺境」への眼差しの構築と時を同じくすると著者は述べる（p. 26）。第16章でとりあげられるカボクロ（アマゾンの住民）の一般的用法もこうした眼差しを共有している。

やがて、本来多様であったはずのアフロブラジリアン宗教内での序列化がなされ、「純粹」なアフリカ文化を担保するとされるヨルバ系カンドンブレの優位化を主張する「ナゴ帝国主義」が展開されていく。そうした「アフロ」の純化は30年代半ばから、人類学者ハースコヴィッツの言説によって強化されていく。異文化との相対性を指向し、その階層化を拒絶する文化相対主義が皮肉にも導いたのは文化内部の均質性・純粹性であった。その帰結は「アフロブラジリアン宗教」の構築と、そのモデルに見合わない「不純」な「コピー」の従属化であった。

先に本書1部では「アフロアマゾニアン宗教」の探求がなされると書いたが、それは「これぞアフロアマゾニアン宗教」という定義づけの作業とは質的に異なることを指摘しておきたい。

多様で、個人的に見える憑依は、しかしながら、無際限に個々人の信仰の語りへと広がっていくようなものではない。「憑依をめぐる人々の語りが、聞けば聞くほど拡散してしまうにもかかわらず、彼らの営みが私的な幻想へと解体してしまわないでいる」(p. 307) 理由がそこでは問われている。そこで著者は本来あるべき信仰や憑依のありかたを追及するのは違った方向へと問いの変換を行う。

テヘイロ（儀礼を行う家屋・グループ）のリーダー宅に寄宿した著者はそこで女性の霊に憑依された男性と、さも女性と会話するかのようなコミュニケーションを持つ。傍から目撃するものにすると著者が信仰を持ち、科学的知見からするならば存在すら疑わしい霊と交流を持っているかに見える。そこで著者にとって重要なのは、憑依が起きたという事実よりも、混沌とし、個別であるはずの憑依が共有の「憑依のイディオム」により語られ、彼（女）らが「語りの共同体」の中に編入していることなのである。ミディアムの「深層心理」に言及しない信仰の記述への疑念へと帰結するような問いが不可避に生起する。しかし、上で述べた「問いの転換」はここにある。

深層心理に言及しない民族誌的記述に対する批判が陥っているのは、かような心理学的探求をこそ可能にする何らかの実定性を盲目的に受け入れてしまっているという部分である。それを所与のものとし非歴史化することにより、アフロアマゾン宗教の「真正性」は担保され、信者と非信者との境界は自明視される。アフリカ性の主張は状況的であり、多くの信者にとってその事実は強い関心を引くものではない。逆に、象徴としての「アフリカ」がウンバンダ神学に傾倒する中産階級の白人によって主張されるといった倒錯的事実も存在する。文字通り、「アフリカは新たに学ばれつつ」(p. 83) あり、資源として操作の対象とさえされているのである。

オリエンタリズム批判を経由したラテンアメリカ研究が直面している問題もここにある。アカデミズムから発せられる言説の権力性が捉え返され、遂行的な「ラテンアメリカ」の構築が批判の対象となる今日、目指されるべきは「一見奇妙に見える営みを、私たちにとってなじみのある別の何かに還元してしまうことなく理解する」(p. 309) という姿勢ではないだろうか。著者が翻訳に参加し、本著と時を同じくして刊行された『文化の窮状』(人文書院)のJ・クリフォードの言う「旅」とは、地域研究に従事する我々に苛立ちすら強いるであろう。現前する風景をありのままに受容し、不気味な他者の存在をそのものとして許容する曖昧さにたえること。古谷のフィールドノートを逆さに読んだ憑依霊のエピソードが語るように、我々の「知」は常に挑戦を受けている。その意味で「いま窮状に直面していない学問などは、単なる作業にすぎない」(『異種混淆の近代と人類学』p. 48) という言明は同時にラテンアメリカ地域研究に向けられたものなのである。

10年という時間は精緻化を極める理論動向を勘案するならば短いスパンではない。しかし、語りに耳を傾け、「カバナージェンの史観」の可能性を探る本書は、歴史理解の鍵として大衆文化に照準する文化研究をはじめ、構築主義、サバルタン研究などとして今日語られる理論動向を先取りしている。不足を論ずるよりも、理論と地域研究の豊かな節合を積極的にここに見出したい。

